

アンをめぐる人々

モンゴメリ・村岡花子訳



新潮文庫

Title : FURTHER CHRONICLES OF AVON
Author : Lucy Maud Montgomery
Copyright © 1912 by Harrap Publishing Group
Japanese language paperback rights arranged
with Harrap Publishing Group Ltd., London
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

ひと
アンをめぐる人々
—第八赤毛のアン—

新潮文庫

モ - 4 - 8



Published 1959 in Japan
by Shinchosha Company

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛にご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)二六六―五一一
編集部(〇三)二六六―五四四〇
振替東京四一八〇八番

発行所 株式会社 新潮社

発行者 佐藤 亮一

訳者 村岡 花子

昭和三十四年四月二十日 発行
平成元年十一月十五日 五十六刷改版
平成二年十二月十五日 六十二刷

印刷・株式会社光邦 製本・憲専堂製本株式会社
© Midori Muraoka 1959 Printed in Japan

ISBN4-10-211308-8 C0197

文 庫

アンをめぐる人々

—第八赤毛のアン—

モンゴメリ
村岡花子訳



新 潮 社 版

目次

一	シンシア叔母さんのペルシャ猫	七
二	偶然の一致	三〇
三	父の娘	五〇
四	ジェーンの母性愛	八三
五	夢の子供	一〇三
六	失敗した男	一二一
七	ヘスターの幽霊	一三七
八	茶色の手帳	一五一
九	セーラの行く道	一六四

十	ひとり息子……………	二七九
十一	ベティの教育……………	二〇九
十二	没我の精神……………	二三七
十三	デイビッド・ベルの悩み……………	二七三
十四	珍しくもない男……………	二九一
十五	平原の美女タニス……………	三〇七

解説 村岡花子

アンをめぐる人々

—第八赤毛のアン—

一 シンシア叔母^{おば}さんのペルシャ猫^{ねこ}

それが話題にのぼるたびに、マックスはこの猫のことをありがたがる。私としても結局いい結果となったことは否定しない。しかし、あの憎^{にく}らしい猫のおかげでイズメイと私がせつない思いをしたことを考えると、真っ先に胸にうかぶのは感謝の気持などではない。

私はもともと猫は好きでなかったが、しかし、猫は猫なりにいいものだということとはみとめるし、自分で身の始末ができて、いくらかでも世の中の役に立つという、りっぱな、貫^{かん}禄^{ろく}のある、老いた牝^{めす}猫なら、苦にはなっても無事にいっしょに暮^くらしていける。イズメイのほうは今も昔^{むかし}も大の猫ざらいである。

しかし、猫を熱愛するシンシア叔母さんには人が猫をきらうこともありうるということが、どうしてものみこめなかった。イズメイも私も心の底ではまったくの猫好きなのだが、性質がどこかひねくれているために、口に出してはそんなけぶりもみせず、頑^{がん}固^こにきらいだと言いはっているものだ、叔母さんは思いこんでいた。

猫という猫の中でも、シンシア叔母さんのペルシャ猫くらいいいやな猫はなかった。実際、叔母さん自身にしても、私たちははじめからうすうすそうではないかと思っていたのだが、あの猫を愛情よりむしろ多分に自慢^{じまん}の気持で遇^{あひ}っていたのである。このわがままな美人より、

善良なありふれた猫のほうに叔母さんにしたって十倍も気が楽だったろうに。

しかし、登録された系図づきの、市価百ドルというペルシャ猫を持つているということが、叔母さんの自尊心を非常に満足させ、ほんとうにこの猫は自分にとって掌中の玉だと思いいんでいた。

それは子猫のとき、宣教師をしている甥がはるばるペルシャから持つてきて叔母さんに贈ったもので、その後の三年、叔母さんの家ではまめまめしくこの猫に仕えることに明け暮れた。色は雪白で、尾の先に灰青色のまだらが二つあり、目は青く、耳は聞こえず、体は弱かった。シンシア叔母さんは猫が風邪をひいて死にはしないかといつも心配していたが、イズメイと私はそうなつてくれたらいいのにと念じていた。それほど、この猫のことや、その気まぐれぶりを聞かされるのに、うんざりしていたのである。しかし、私たちはシンシア叔母さんに向かつてそうとは言わなかった。おそらく叔母さんは二度と私たちに口をきこうとしないであろうし、叔母さんを怒らせるのは賢明でなかった。係累はなく、ふくらんだ預金通帳を持った叔母のある身ともなれば、できることなら叔母と仲よくやっていくにこしたことはない。それに実際、私たちはシンシア叔母さんがたいそう好きであつた——ときにはである。

叔母さんはどちらかといえば、人を怒らせるたちで、ガミガミ叱言を言ったり、欠点をならべたりするので、これでは叔母さんをきらいになるのもあたりまえだと思うのだが、ときには叔母さんは一転して実に感じのよい、親切なことをしてくるので、これでは叔母さん

を愛するのが私たちの道だと考えざるをえなくなるのである。

そういうわけで、叔母さんがフアーティマのことを——猫の名前はフアーティマといった話すときには私たちはおとなしくそれに耳を傾けたし、この猫の死を願ったことがわなかったとすれば、のちに私たちはじゅうぶん、罰をこうむった。

十一月のある日、シンシア叔母さんはスペンサーヴェルに入港してきた。ほんとうは肥えた灰色の馬をつけた馬車できたのだが、なんとなく、叔母さんは順風につて颯爽と入港する、帆をいっばいにはった船という印象をいつも与える。

その日は私たちにとつてまったく厄日で、なにかもうまいかなかった。イズメイはビロードのコートにあぶらをこぼし、私が作っているあたらしいブラウスの仕立てぐあいは手のつけようなくゆがんでいるし、台所のストーブはいぶつてパンは酸っぱくなった。そうえ、私たち一家に古くからいる、信頼のおけるばあやであり、料理番であり、総指揮官でもあるハルダ・ジェーン・ケイソンが、彼女の言葉をかりれば、肩に神経痛がおこった。ハルダ・ジェーンは年寄りとしてはまたとなくよい人間であるが、「神経痛」がおきたときには家の中のほかの者たちは家出をしたくなるほどであった。

そこへもつてきてシンシア叔母さんが頼みごとをたずさえて訪れたのである。

「おやまあ」シンシア叔母さんは鼻をフンフンいわせながら言った。

「いぶりくさいじゃないか？ お前さん方はかまどの扱いがひどく下手なのにちがいない。だが、男手もなしに娘二人で一軒をきりまわしていこうというのだから、そんなことは期待

するのが無理だ」

「男手がなくてもけっこうやっておりますわ」と、私はみえを切った。

マックスはまる四日も姿を見せず、だれもとくべつマックスに会いたいなどと思いはしないけれど、どうしてかしら、と気になるのであった。

「男なんて邪魔じゃまですもの」

「そう思うふりをしているだけさね」と、シンシア叔母さんは癪しゃくにさわることを言った。

「だが、お前さんも承知ちやうちしているように、心からそう思っている女は一人もいないからね。エラ・キンボルを訪ねてきている、あのかわいいアン・シャリーはそうは思っていないんだよ。今日の午後、ドクター・アービングとお互たがいにひどく気にいっているようすで散歩をしているのを見たがね。お前さんがいつまでもぐずぐずしていると、マックスだってお前さんの指のあいだからつるつとすべり落ちないとはかぎらないよ」

それをこの私に言ってきかせるとは当を得たことだった。

私は数えきれないくらい幾度いくども、マックス・アービングの申込みを拒絶きよぜつしてきたのである。激怒げきどした私は腹の立つ叔母にいとものにこやかにほほえんでみせ、

「まあ、叔母さん、なんておもしろいこと。まるでわたしはマックスと結婚けっこんしたがってでもいるみたいなことをおっしゃるわ」

と、おだやかに言った。

「そのとおりじゃないか」

「そうなら、何度も断わるわけがないじゃありませんか」

私が何度も断わっているのをシンシア叔母さんはよく承知していた。マックスがいつも話すからである。

「どんなわけか知らないけれど、あまりたびたび繰返すと、しまいにや真に受けられてしまうよ。あのアン・シャーリーという娘にはどこか、たいそう人をひきつけるところがあるしね」

「たしかにありますわね。あんな美しい目の人つて、わたし、見たことがないくらいですわ。あの人こそマックスにちょうどいい奥さんでしょうから、マックスがあの人と結婚すればいいのと思いますわ」

「フン、まあいい、わたしもこれ以上、お前さんをそそのかして、心にもない嘘をつかせるのはやめましょう。それに、マックスのことでお前さんにお説教しようと思つて、今日この風の中をわざわざ出かけてきたんじゃないからね。わたしはハリファックスにふた月ほど行くことになったので、留守のあいだ、ファアーティマを預かってもらいたいのだよ」

「ファアーティマですつて？」

と、私は叫んだ。

「そうだよ。召使いたちにはとても任せておかれないからね。ミルクはやる前に必ず温めることを忘れないでおくれ。それから、どんなことがあつても家の外へ出してはいけませんよ」

「あんたが自分であの憎らしいフアーティマの世話をすりやいいわ」

シンシア叔母さんのうしろにドアがしまると、イズメイが言った。

「わたしは棒の先でだってフアーティマになんぞさわらないから。わたしたちで引受けます、なんて言う権利はあんたにないんじゃないの」

「引受けますって、わたしが言ったこと？」

私は不機嫌ふきげんに問いかえした。

私はイズメイの方を見るし、イズメイは私の方を見た。二人ともどうしようもないことがわかつていた。断われれば叔母さんはひどく怒ってしまうであろうし、それに、私が少しでもいやだというそぶりを見せたら、叔母さんは自分がマックスのことをああ言ったからそれを根にもつてのことと思ひこんで、そのことをこの先何年も繰返し言うにちがいない。だが、私は思いきつてきいてみた。

「叔母さんが留守なすっているあいだに、もしもフアーティマの身になにかおこったら、どうしましょう？」

「あれを任された以上、そんなことは防がなくちゃいけない。とにかく、なにごともおこさせてはなりませんよ。ちよつとした責任を持たされるのもお前さんのためになるよ。それに、この機会にフアーティマがほんとうにどんなにかわいいかわかることだろうしね。さあ、これですっかり話は決った。明日、フアーティマをよこしますからね」

「シンシア叔母さんのほうで当然わたしたちが承知したものと決めてしまったんじゃないの。」

だから、ぶつくさ言っただってなんの役にも立ちやしないわよ」

「なにかおこったときには、シンシア叔母さんはわたしたちの責任だと言うわよ」と、イズメイが険悪な面持で言った。

「アン・シャーリーはほんとうにギルバート・ブライスと婚約していると思う？」と、私は好奇心をこめてきいてみた。

「そう聞いてるわ」

イズメイは上の空だった。

「ミルクのほかになにか食べるかしら？　ねずみをやってもいいのかしらね？」

「ああ、いいと思うわ。だけど、マックスがほんとうにあの人を好きになったのだと思う？」

「きつとそうよ。そうなら、あんたもどんなにほつとするかしないわね」

「もちろんですとも」

私は冷やかに答えた。

「アン・シャーリーであろうが、アン・なんとかであろうが、マックスと結婚したいというならご随意にそうしたらいいわ。わたしはご免よ。イズメイ・ミード、このストーブはなんでこういつまでもくすぶってるのかしら？　わたし気がどうかかなりそうだわ。なんていやな日なんだろう。あんなもの大きらいだわ！」

「知りもしない人のことをそんなふうに言うもんじゃないわ。人はみな言っているわよ。アン・シャーリーは美しいって——」

「わたしはフアーティマのことを言っているのよ」私は激怒して叫んだ。
「あらまあ！」

と、イズメイは言った。

ときどきイズメイは阿呆あほうのようなことがある。この「あらまあ」という言い方が容赦ようしゃのないほど間が抜ぬけて聞こえた。

フアーティマはあくる日到着とうちやくした。

内側に綿を入れて真紅しんくの繻子しゆすではった蓋ふたつきの籠かごに入れてマックスが運んできた。マックスは猫族もシンシア叔母さんも好きなのである。彼はフアーティマの扱い方を説明し、イズメイが部屋を出ていくと——イズメイは私がとくべつそばにいてもらいたいと思うときにかぎって、そうと知っているくせにきつと出ていってしまうのだ——マックスはまたもや、私に結婚の申込みをした。

もちろん、私はいつものように断わりはしたが、どちらかといえばうれしかった。マックスは二年にわたり、ふた月ごとに私に申込みをつづけてきた。ときには今度のように三月におよぶこともあり、そんなときにはどうしてかしらと私はいつも気になるのだった。

アン・シャリーにはほんとうに心をひかれたわけではないのだと思いいたり、私は安心した。マックスと結婚したいとは思わなければ、彼を身近におくのは楽しいことだし、便利でもあるから、だれかほかの娘がマックスをさらっていったら、私たちはさぞ寂さびしい思いをすることだろう。マックスは実に役に立ち、私たちのためにどんなことでもいつ

も快くしてくれた——屋根板を釘でとめるとか、町へ馬車で運んでくれるとか、じゅうたんを敷くとか——つまり、私たちのあらゆる難儀にあたり、すぐに救援の手をさしのべてくれる存在なのである。

そういうわけなので、私は拒絶しながらもマックスにこやかにほほえみかけた。マックスは指を折って数えはじめたが、八つめになると、首を振り、またはじめからやりなおした。

「なにをしていらっしゃるの？」

と、私はきいた。

「君に何度、申込みをしたか数えてみているんだが、しかし、僕らが庭を掘りかえたあの日にも申込んだかどうか、思い出せないんですよ。もしも申込んだとすると——」

「いいえ、申込まなかったわ」

と、私はさえぎった。

「それでは、十一回になるな」

マックスは考えこんだ。

「そろそろ限度がきたようだ。おなじ娘に十二回以上、申込みをするのは僕の男としての誇りが許しませんからね。だから、このつぎが最後というわけですよ、いとしいスー」

「まあ」

と、ややぶつきら棒に言った私は、マックスに「いとしいスー」などと呼ばれたことに腹